

「今にして、思えば！ですけれども」

齋藤新一

はじめに

今年度3月末に定年退職しました。38年間の教員生活，そんなに経つのか。感慨深い気もするが，あっという間でした。初任校が八千代台西中，そして，最後も八千代台西中で，とっても幸せです。大昔のことを色々振り返りながら，思いのまま書き綴らせていただきます。全く活動報告でもありませんし，何の役にも立たない勝手なつぶやきの内容？いや，自伝になりそうな気もしますが，時間がある時の軽い読み物のように扱っていただき，お許し下さい。すべて「今にして，思えば」の内容です。

1. こんなだったんです。私の初任時代

なぜか38年前の初任の頃のことはいっしょ覚えています。当時の西中は創立8年目，各学年8クラス，45人学級だったので学年の生徒は360人弱でした。先生方は50人近くいたように思います。

私は2年の副担，校務分掌は拾得物のみ，何をすればいいのか尋ねると，「忘れ物や落とし物があつたら，あのショウケースに入れといて」でした。学年の分掌は「学年のお菓子を切らさないように」でした。毎月給料日(当時は現金手渡しでした)に学年の先生方から500円づつ集めて，八千代台の「ポポ」に買い出しに行きました。スクーターに乗ってジャージ姿サンダルで。この2つが私の分掌としての仕事でした。

授業は社会科は1クラスのみで，あとはすべて美術でした。しかも当時の美術の授業は2時間続き，紙の上に立体を描くことができない，美術の評定2の私にとって，苦痛の時間以外何物でもなかったです。でも生徒の質問には堂々と答えていました。

初任として勤務して1か月ほどたったある日，朝自習の時間に体育館で学年集会を行うことになりました。全クラス体育館に入ったあと，「じゃ，職員打合せでみんな職員室に行くから，齋藤先生はここで静かに生徒を待たせておいて。まあ，やっと覚えた校歌でも歌ったら」と言われ，体育館に私一人残されました。とんでもない「無茶ぶり」です。一瞬心臓が止まりそうになりましたが，生徒たちに事情を説明して，少しこのまま待つように話しました。生徒達はとても良い子たちで，誰も騒がずしゃべらず，無言でしーんとしたまま2～3分の時間が過ぎましたが，どうにも私がこの静けさに我慢できなくなり，「ちょっと校歌でも歌いますか，私もやっと覚えたので。誰かピアノ弾けますか」といったら女子生徒が3人くらい手を挙げてくれました。みんなで校歌を歌って過ごしました。元気のある素晴らしい歌ではなかったような記憶ですが，とってもいい時間でした。「無茶ぶり」のおかげで。その後も「無茶ぶり」はとめどなく続きました。おかげで，大変鍛えられました。慣れました。年を重ねると徐々に自分が他の先生方に「無茶ぶり」をたくさんするようになりました。

「世の中，無茶ぶりで，できてるんです。でも人を育てます。」よく使う言葉です。

こうして書いてみると，「一体何やってるの」という話になってしまいそうですが，

一番思うのは、一緒に過ごした先輩の先生方の顔ぶれが凄いです。加賀谷先生は勿論、萩原先生、薬師寺先生、国語の亀井先生、豊田先生、相澤先生、渡辺昌子先生、蜂谷先生、・・・ときりなく浮かんでいきます。若い先生方、特に小学校の先生方にはピンとこないかもしれませんが、皆さん大変なアイディアと実行力を持った神様の領域に達したような先生方だったのです。これも今思えば、ですが。知らず知らずのうちに何物にも変えがたいものを数えきれないほど吸収していたに違いありません。

どのクラスも典型的な学級王国でしたが、そこから学んだのでしょうか？担任として2回卒業生を出しましたが、自分の学級経営も勝手にやり放題でした。私のクラスの学級目標が「5組に勝つ」になった時がありました。5組はカリスマH先生(大先輩です)が担任の学級ですが、1年生の時、ほぼすべての行事で優勝しました。勿論、子ども達が決めた目標ですが、どんなに小さなことでも5組にだけは負けない。特に合唱コンクールは絶対学年でトップになる。というものです。本当に合唱コンクールは1番になったと記憶しています。他にも公にはちょと言えないこと(紙面には残さない方がよいこと)がたくさんあります。若さのみの勢いと「やってみたい」という思いだけで、本当に色々なことに挑戦しました。「毎日毎日楽しくて仕方ない」という感じでした。能天気な私の性格がそう思わせていただけかもしれません。

印象に残っていることは他にもたくさんあるのですが、最後に一つだけ、当時は学級活動(学級会)と学級指導を明確に分けて考えていました。西中ではどちらに力を入れてやるのか、または、研究の中心をどちらにするのか？だったのかもしれませんが。初任の私にはよくわかっていないのですが、なぜか職員会議が紛糾していて、先生方が喧嘩もめにもめて、約半分の先生方が怒って職員室から出ていくという事件が起きました。私はとりあえず、当時の学年主任についていきましたが、ほぼ喧嘩状態でそれぞれの先生方が自己主張してました。忘れられません。とにかく熱い、譲らない。先生方は普段からいたるところで喧嘩もめ自分の思いをぶつけていたように思います。学年の飲み会でも殴り合うような勢いで言い合っている場面を何度も見ました。(聞いていました。)そんな中で、学級会や学級指導、短学活(朝の会・帰りの会)で子ども達にどんな活動をさせるのか。教師はどの場面で何をするのか、何を話すのか、班活動のさせ方等、本当に多くのことを学びました。勿論、実際に挑戦したことも数えきれません。思い通りにならないことも多々ありましたが、自分自身がそうやって成長していったはずです。これも、今にして、思えば、です。

特に短学活(朝の会・帰りの会)が20分間とってあり、朝の会や帰りの会の指導案を書いていた時期がありました。これは勉強になりました。班活動(班競争)を充実させて、学級、個人を育てる。リーダーとフォロワー関係づくりをする。班活動が得意な先生方がたくさんいて、班活動をメインにした学級経営を本当に多く学びました。

授業や部活動も含めて、西中で学んだことは、私の教師人生の原点で、すべての基盤です。よく言われることですが、初に覚えたことは一生身について離れない。これも、今にして、思えば、です。お世話になった先輩の先生方には感謝しかありません。

2. こんなだったんです。私の最後の3年間

校長として西中に着任した1年目。行政(市教委の青少年センター)に3年間いたため、現場に対しては浦島太郎的などころがありました。初めての校長という点でも不安いっぱいなどころですが、不思議とワクワクしていました。楽しみで仕方ない感じ。現場に戻れる(自由な、広い野に放たれた感じ)、生徒と先生方が常にいる、しかも初任校の西中。嬉しい気持ちでいっぱいでした。4月1日、職員玄関を入ると全職員で迎えてくれました。その瞬間背筋が伸び、気合が入りました。「校長をやらなきゃ」と思いました。一瞬で校長としての自覚と責任を感じました。でも「おはようございます。よろしくお願ひします」とお互いに挨拶を交わすと、それだけで緊張もほぐれて、足取り軽く校長室に向かいました。

西中は各学年4クラス、40人学級で弾力の学年もあり、学年120人～130人で全校でも380人程度、38年前の3分の1の規模です。教員も25人程度です。

自分自身の大きなテーマは挑戦。「失敗を恐れず挑戦する勇気」を経営方針にも入られて、生徒・先生方にも「挑戦しよう。やってみないとわからない」を結構繰り返し話していました。今にして、思えば、です。実際、数多くの生徒や先生方の素晴らしい挑戦に感動したことも数多くありました。学校、生徒、教師が成長し変わっていくことが実感できました。

「挑戦」について、引退を発表した時のイチロー選手の言葉とIPS細胞でノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸也さんの言葉が好きで、よく引用していました。1部ですが紹介します。ちょっと紙面を多く使いますが。

<イチロー選手の引退記者会見から>

成功したことは？と質問されて

「成功という言葉が嫌いなんです。例えばメジャーへの挑戦は大変な勇気がいる。

成功すると思うからやってみたい。それができないと思うから行かない。という判断基準では後悔を生む。やってみたいなら挑戦すればいい。どんな結果が出ようと後悔はない。基本的にやりたいと思ったことに向かっていった方がいい。」

<山中伸也さん インタビューから>

「実験の多くは失敗に終わる。でも、だからやらないのではなく、もしかしたら成功するかも、と考えることが何よりも大切だ。～略～ また、失敗に見えることが、実は素晴らしいことの始まりかもしれない。ある目標にとっては失敗だったことで、別の新しい道が開けたことが数多くある。」

この二人は他にも数々の名言を残しています。私はいつからか、こういった著名人のインタビューや研修会の講師の言葉、テレビドラマの中で名言をすぐメモって、後でPCのホルダーにためておくようにしました。そんなに役に立つことはないかもしれませんが(もしやスポーツバンドの歌詞に生かせるかな・・・なんて考えてません)。

特に1年目は色々やったなと思います。2年目は年度末人事を受けての学年配当に苦戦・・・というより学年が組めない、足りないe + sで、挑戦どころではないかも？が頭をよぎりました。最優先は先生方が1年間体を壊さず、健康で元気にやってくれる

こと。これに勝る校長の使命はない。と思いつつ過ごした1年間でした。3年目は、コロナ禍でした。2年目、3年目に後悔し、悔いが残っているわけではありません。勿論、挑戦する気持ちは常にあり、実際、子ども達の元気と輝き、素晴らしい発想力に励まされた3年間でした。生徒が活躍する場面は確実に増えました。リーダーに立候補する生徒はびっくりするほど増えました。「学校は生徒がつくる」も大切にしてきた意識です。その陰に先生方の指導力と協働できる素晴らしい力(チーム力)があったことも忘れてはいけません。これも、今にして、思えば。です。

もうひとつ、大切に思い続けたことは、私も含めて「教職員は先見性を持たなくてはいけない」ということです。改訂された学習指導要領が今年度より中学校でも完全実施されます。これは、この先10年を見据えたものですし、教育過程を組む上で欠かせないものですが、教職員自ら、子どもたちが活躍する未来を見つめた教育(指導)をする必要があるということです。内閣府が作成した **Society5.0** の動画を全校生徒・先生方に見せました。その後少し時間を取って周りの人と話をさせました。大変盛り上がってました。グローバル化も含めて、どんな世の中になるのか、その中で活躍するためにはどんな資質能力が必要なのか。まずは、そこをそれぞれの先生方が意識して見つめてみる。自分なりの考えを持つこと。先見性を持った指導をすることが大切だと感じます。また、コロナ禍で学んだのは「慧眼けいがん」：物事の本質を見抜くこと。様々な行事や授業内容が制約される中で、学校は何のためにあるのか、それぞれの行事の意義は何なのか、考えさせられる一年でした。「新たな教育へのスタート」を切るためには欠かせないことだと思います。校長としてその思いは常にあったのですが、どうやら私の力量では・・・できることにはすぐ限界がきました。

おわりに

3年目に入った時に、加賀谷先生から「今年で終わりか、校長も3年やると飽きるだろ」と言われました。あまりにも加賀谷先生らしい言葉に、納得です。私は3年間で飽きたわけではありませんが、まだまだ頑張るガッツはないかもしれません。

残念だったのはコロナ禍で旅行に行けなかったことと、そして何より、皆さんと外飲みができなかったこと。もう家飲みにも慣れましたが、残念な思いは残ってます。本当に多くの先生方に支えられ、特に西中の先生方には初任時代に鍛えられ、最後の3年間は自分では何もできない校長をチームワーク良く支えていただき、本当にありがとうございました。あっという間の幸せな38年間でした。今にして、思えば。

先日、久保先生からいただいた社会科教育に関する資料の中に昭和23年に出された「小学校学習指導要領補説」がありました。その中に公民的資質とは、「社会に目が開かれていること以上のもので、人々の幸福に対して積極的な熱意を持ち～略～人類にはいろいろな問題を賢明な協力によって解決していく能力があるのだと確信する心です。」という一文がありました。60歳の私は公民的な資質を持っているのでしょうか。まだまだです。無理しない程度にこれからも精進したいと思います。